

『平家物語』の建礼門院造形

—延慶本を中心に—

趙 文 珠

一 はじめに

建礼門院徳子は、平家一門の榮枯盛衰を象徴する人物で、源平時代の全期間を通して、常に激動の中心点に身をおきつつ生き残った生き証人であった。数奇な運命を辿った彼女の生涯は、さまざまな方向に想像力を刺激するものだったろう。『平家物語』の諸本には、それぞれの構想や性格を反映した建礼門院造形が図られている。

諸本の建礼門院関連記事については、特に女院往生物語（いわゆる六道物語）を中心に、これまで様々な角度から論じられてきている。それが、女院の往生と、それに伴う安德帝・平家一門の救済を語ろうとするという認識は共有されているといえよう。最近の研究では、その救済の物語の中での後白河院の役割が目され、たとえば、大津雄一は後白河院の涙こそ平家一門の救済と同時に、「王権の浄化と救済」をもたらしたとし、佐伯真一はそれが後白河院と建礼門院をめぐる噂によるものと論じている。

本稿は、これら先学の論を受け、まず、記録類に見える建礼門院の記事を後白河院との関係を中心に検討し、それを踏まえて延慶本の建礼門院造形の特徴を考察していく。

二 後白河院と建礼門院

古態本と言われる延慶本には、後白河院と建礼門院との男女関係を連想させるいくつかの記事が見られる。はたして、それは事実と関係あるものだろうか。

後白河院と建礼門院を巡って種々の取り沙汰があったであろうことは、次の『玉葉』の記事からよく知られている。

・十三日、申庚晴、(前略)兼光密々云、若大事出来者、中宮可納法皇之宮由、或人和纒、禪門、及二品、有承諾之気色、而中宮聞此旨、枉被仰出家事已切、仍忽變其儀、以至恐巫字女腹之女子、世號姫君云々、可替之云々、法皇平以辞退之故、日来不一定、猶事成就、明日十四日、必定可被遂其儀云々、夢歟、非夢歟、凡言語不所及者也、(『玉葉』治承五年正月十三日条)

これについて、水原慶二は次にあげている『玉葉』の同年十二月十三日の建礼門院「入内」の記事を指摘し、「恐らく一時にせよ建礼門院はいわば平家の失地回復の生贄として後白河院の法住寺御所

にすえられたのであろう」とし、また、佐伯真一は「入内」の用語に疑問を表しながら、「とはいえ、もし、この日の法住寺移徒と建礼門院入内が無関係であったとしても、『玉葉』正月十三日条がある以上、当時、建礼門院と後白河院の関係が種々取り沙汰されたことは十分考えられる」と述べている。

・十三日、乙卯天晴、(前略)今夜院御所御渡云々、又建禮門院入内云々、子細追可尋記、(『玉葉』同年十二月十三日条)
以下、両氏の論を参考にしながら後白河院と建礼門院の関係についてのいくつかの事実を確認していきたい。

まず、その真偽が問われてきた「建礼門院入内」云々は、次の『明月記』の十二月十三日条から知られるように、後白河院新御所への御幸だったことを確認しておく。

・十三日。天晴る。今日、上皇新造御所に御移徒。八条院同じく渡りおはします。(略)今夜建禮門院、又初の御幸と云々。さて、後白河院の徳子に対する異常な関心は、懐妊の時から知られていた。徳子の妊娠の様子は『平家物語』にも詳しいが、実際に、彼女は物怪に苦しみ、御産所では毎日のように祈禱が行われていた。舅の後白河院は四回に渡って御産所を訪れ、自ら護身法を行っており、皇子誕生の十一月十二日にも御産所に駆けつけている。孫を待望した爺の姿と読み取れなくもないが、たとえば、出産四日目に中宮御所の六波羅を訪れる後白河院の行動は、「大略三十日可被忌之儀、有變改歎、素不被甘心事也」(『玉葉』治承二年十一月十四日条)と非難されるほど異例のものであった。

後白河院と建礼門院の間柄が取り沙汰されたのは、以仁王事件、

『平家物語』の建礼門院造形

福原遷都をへて都選御のあった治承五年正月頃であり、その時、高倉院は危急な状態であった。諸国の反乱の動きに慌てた平家は既に後白河院の政治復帰を示しており、おそらく清盛夫婦は失地回復のため徳子の後白河後宮入りを承諾したのではないか。

いずれにしても、建礼門院後宮入りの噂があった日から十日ばかり遡る『玉葉』の治承五年正月十三日条によると、当時、後白河院と徳子が同じ御所で生活していることが知られる。

・三日、庚戌天晴、(略)彼殿退出之後、大将參院、法皇、上皇、中宮、三所同居、(『玉葉』)

高倉院の病気のためだとはいえ、はなはだ異例なことであったろう。

治承五年一月十四日、高倉天皇は二十一才の若年でなくなる。その年の閏二月には後白河院と常に対立してきた平清盛も死去し、院は事実上の政治復帰を果たしている。

ところで、同年四月九日、計画された徳子の院号が突然延期されることがあった。延期の理由は後白河院が熊野參籠のため御幸できなくなつたためであり、その事実を伝えられた兼実は、「御幸何故哉、未得其儀」と驚きを隠さなかった。

さて、話を『玉葉』の「入内」の記事に戻そう。兼実が建礼門院の入内に「子細追可尋記」という真剣な態度を見せているのは、後白河院と建礼門院をめぐるこのような一連の動きと関係あるものだったといえよう。

しかし、これらの記事が必ずしも後白河院と建礼門院の艶聞を意味しているとはいえない。次の『明月記』、『平家物語』の記事から

『平家物語』の建礼門院造形

もわかるように、建礼門院の「入内」当日、後白河院の姉である八条院も同じく御幸しており、後白河院は、八条院を始め西門院、皇后宮亭子と同居することもあった。

・ 十三日。天晴る。今日、上皇新造御所に御移徒。八条院同じく渡りおはします。(『明月記』治承五年正月十三日)

・ 十三日、院の御所に移徒あり。公卿十人、殿上人四十人供奉して、うるはしき御粧にてぞ有ける。本渡らせ給し法性殿御所をこぼちて千体の御堂の傍につくりて、女院方々すへならべまひらせて、おほしめすさまにてぞ渡らせ給ける。(延慶本三本 『院の御所に有移徒事』)

建礼門院は他にも、安徳天皇が初めて朝覲を勤めた寿永二年(一一八三)二月二十一日の前日の夜、後白河院御所に渡っているが、次の『吉記』の記事から知られるように、それは公の行幸で、二人の艶聞を裏付けるものではなかった。

・ 二月二十一日丙辰 白夜雨降、辰刻以後雨脚忽雖休、陰晴猶不定、午後屬晴、今日朝覲行幸也、(略) 建禮門院、前夜臨幸、以小寢殿南面為御所、以其以東三ヶ間為女房御所、有打出、行幸、(『吉記』)

以上、建礼門院と後白河院の関係について簡単に見てきた。建礼門院をめぐる種々取り沙汰されていたことは事実だが、後白河院と建礼門院の男女關係を裏付ける記録は、今のところ見当たらない。

しかし、「日本国第一の大天狗」(『玉葉』文治元年十一月二十六日条)と密かに呼ばれた後白河院の異例な行動は常に噂を立てるに

十分なものであり、兼実がそれらの噂をありうることとして受け入れているところは留意される。

三 延慶本平家物語の建礼門院造形

平家物語の建礼門院関連記事についての先行研究は、特に女院往生物語(灌頂卷)を中心にその構造・役割を問う論が多く、物語の主人公である建礼門院の人物造形に直接言及した論は少ない。

そうした中で延慶本の場合、建礼門院造形の具体的考察とは言えないが、女院出家説話の唱導性に注目し、平家一族の滅罪、鎮魂の祈願の具体化を指摘した小林美和論、『長恨歌伝』に拠った「付楊貴妃被失事」の記事が楊貴妃を建礼門院に、後白河院を玄宗に比することによつて、院の政治を痛切に非難したものと把握した牧野和夫論、読み本系の灌頂卷(相当記事)が女院の心のひだに分け入り、女院自分の罪業を問う女院物語を形成しているとする今井正之助論などが、示唆するところ多く留意される。¹⁰⁾

以下、これらの論を踏まえ、延慶本の建礼門院造形の特徴を見ていく。

まず、延慶本の建礼門造形の特徴を端的に示していると思われる建礼門院と後白河院の対面の部分を掲げる。

①法皇は「煙立思ならねど人しれずわびては富士のねをのみぞなく」と、朝夕詠じける、清原深養父が建たりし、補陀落寺をがませ給べし」と披露して、夜を籠て寂光院へ忍の御幸あり。

②女院はかくとも争か思食よらせ給べきなれば、何に心もなく

法皇に御目を御覧じ合せて、こはいかにと思召て、あきれたる御さまなり。(略)「思外に法皇の御幸なりにけるよ」と思召るるより、「哀、只人に不被知、何方へも消失ぬべかりし身の、人並々に憂世にながらへて、かかる有様を目の当り奉見ぬるこそ浅猿けれ」と、(略)「只夢の心地して、あきれ立せ給たり。折節山時鳥の一声、松の木末に音信ければ、女院かくぞ思召しつづけける。

いざさらば涙くらべむ時鳥我も尽せぬ憂ねをぞなく又思食返けるは、「こは何事ぞ。今はかく思身にあらず。猶も此世に執心のあればこそかくは覺らぬ。さては仏の道を傾ひてむや」と思食て、御衣の袖も裾も、草葉の露にしほれ返たる御さまにて入らせ給にけり。法皇かくと申給たりければ、有つる御衣の上に紙の御衾を引懸て、別の間なる御円座しかせ給て、誠に面はゆげなる御気色にて、御顔打赤めて渡せ給ける御有様を御らむずるに、昔の花の兒もやつれはてて、麻の衣にまつわされおわします後有様、有しにもあらぬ御すがたなれども、指が又なべての人にはまがうべくもみへさせ給わず、

③六道と申候事は、昔杜宮にかしづかれ、万機の政を心のままに行て、榮榮は有しかども愁歎はなかりき。(略) 乏き事の無ままに、苦なる所を忘れて願ふ事無し。只明ても晩ても榮榮比無りし事は、善見城の勝妙樂、中間禪の高台の閣、六欲天上の五妙の快樂も、争か是には過むと覺き。是をば暫く天上の樂と申准へ付き。

④家を出、かかる憂身と成ぬる上は、何事にか慎侍るべき。今

こそ申さずとも、後生にて淨頗梨の鏡に移れ、俱生神の札を糺む時は、何の隠か可侍る。天竺の術婆迦は後の宮に契をなして、墓なき夢地を恨。阿育大王の子具那羅太子は、繼母蓮花婦人に思を被懸うき名を流し、震旦の則天皇后は、長文成に逢て遊仙囀を得給へり。我朝の奈良帝の御娘孝嫌女帝、惠美大臣に犯され、文徳天皇の染殿の后は、紺青鬼におがされ、亭子の院の女御京極御息所は、時平の大臣の女也、日吉詣給けるに、志賀寺聖人心を奉懸、今生之行業を奉讓しかば、哀を懸給て御手をたび、『実の道の指南せよ』とすませ給き。在原業平は五条巨のあばら屋に、『月やあらぬ』と打ながめ、源氏の女三宮は又柏木の右衛門督にまよひて、香をる大将を産給へり。『いかが岩根の松は答む』と源氏の云けむもはづかしや。狭衣之大将は、『聞つつも涙にくもる』と打ながめ、天竺晨旦我朝、高も賤も女の有様程心憂事候わず。(略) 都を出て後は、いつとなく宗盛知盛一船を棲として、日重月を送しかば、人の口のさがなは、何とやらん聞にくき名を立しかば、畜生道をも経る様に侍りき。大方は一旦快樂之榮花に誇て、永劫無窮之苦報をも不覺、出離生死之謀をも不知。只明ても晩ても無墓思にのみほだされて過し侍き。是豈愚痴闇鈍之畜生道に迷るに非や。(第六末「法皇小原へ御幸成事」)

ここで注目したいのは、後白河院との対面で、建礼門院が「誠に面はゆげなる御気色にて、御顔打赤めて渡せ給ける」という独自の反応を見せており、建礼門院の詠歌が二人の關係を暗示していること(②)、建礼門院自ら「万機の政を心のままに」行なつたことを語つ

ていること(③)、邪淫のことを語る独自の畜生道の記事をなしていること(④)などである。

①・②の記事について考えてみよう。

先述したとおり、牧野和夫は延慶本では『長恨歌伝』による独自の「大伯昂事付楊貴妃被失事并役行者事」の章段が設けられ、二人の關係が、もともと皇子の妃であった楊貴妃を自ら後宮に入れて愛した玄宗に重ね合わせられて非難されているとする。その指摘を補足する形になるだろうが、二人の対面を語る①・②の記事でも二人の關係は暗示されているように思われる。延慶本には、後白河院が女院の事を「未だ都に渡せ給ける時も、御心苦事」(第六末「建礼門院小原へ移給事」)に思いながら、頼朝の目を恐れてそのまま過ごさざるを得なかつたとある。女院が大原に移つたのを機に、補陀落寺参詣と偽つて女院を訪れたのである。

ところで、①の傍線部の「煙立思ならねど人しれずわびては富士のねをのみぞなく」の歌は『新古今集』に納められている深養父の詠歌で、まさに後白河院の建礼門院への思いを暗示しているかのように取り入られている。

歌語の「煙立つ思」とは、「むねはふじ袖は清見が関なれや煙の波もたためぬぞなき」(『深養父集』巻十一、恋一)の用例もあるように、相手を思い焦がれる恋の炎で立つ煙を意味し、また、「富士山」は「恋をのみ常にするが山なれば富士の峰にのみ泣かぬ日はなし」(『後選和歌集』巻九、恋一、よみ人しらず)のように、恋の思いを託した詠歌が多い。「富士山に煙が立つような目立つ恋の思いの火ではないけれど、人に知られずに思い悩んでは、富士のね(峰)

ならぬ、身を伏して声を出して泣いてばかりいます」という意味になるだろう。

ちなみに、補陀落寺参詣のことは同じ読み本系の長門本、源平盛衰記にも見えるが、「煙立思」の歌は延慶本にしか見えない。

次に②の、後白河院の来訪を知つた建礼門院の詠歌「いざさらば涙くらべむ時鳥我も尽せぬ浮ねをぞ泣く」について見ていこう。

諸本の中では、語り本の古態本といわれる屋代本が延慶本と同じ設定となっており、ほかに覚一本は法皇還御を見送つた時の詠歌とし、歌の内容も「いざさらばなみだくらべん時鳥われもうき世にねをのみぞ泣く」と、延慶本とは異なる。

市古貞次の指摘するとおり、この「いざさらば」の歌は、御鳥羽院皇子雅成親王の「いざさらば涙比べんほととぎすわれもうきよになかぬ日はなし」(『続古今和歌集』巻十七、雑歌上)を作り変えたものであろう。

ところで、覚一本の歌が元の歌の意味と殆ど変らないのに対して、延慶本の歌は違う解釈ができる。つまり、「憂き世に生きて泣く」と解釈される覚一本と違つて、延慶本の五句の「浮ねをぞなく」は男女關係を表しているといえよう。国歌大観で「うきね」の用例を調べたところ、恋のつらさや旅のつらさを表現する歌が多く、既に『万葉集』の時代から相聞の歌にその用例が見られる。「うきねをぞなく」の場合、三例が見られ、その中の二例が恋歌であった。歌を引用してみる。

・『続拾遺和歌集』雑十三、恋一、兵部卿元良新王家歌合に
よみ人知らず

八三四 涙川せけどとまらぬ暁のわかればをしのうきねをぞなく

・『新後拾遺和歌集』卷六、冬 題しらず 郁芳門院安芸

五一〇 あふことのとどこほりたる水のうへにつがはぬをしのうきねをぞなく

・『続古今和歌集』卷十二、恋歌一、題しらず よみ人しらず
一〇二五 水鳥をよそにみしかど恋すれば我も涙にうきねをぞなく

もちろん、延慶本の歌を単純に寂光院での「浮き寝」、「憂き寝」の意味で解釈することもできよう。しかし、「煙たつ」の歌、「誠に面はゆげなる御気色にて、御顔打赤めて渡せ給ける」という延慶本の独自記事を総合して考えると、やはり、男女関係暗示する歌のように読み取れよう。

延慶本のこのような設定は④の記事からも補強できる。建礼門院は自分の経験した天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄の六道を語った後、女の身の憂さを例を挙げて述べ、自分に近親相姦の噂が立たれたことを畜生道に比している。この近親相姦の話は延慶本、源平盛衰記以外の諸本には見られず、また両本の間には相違が見られる。

『平家物語』の六道物語と『宝物集』の関係について少し考えてみたい。既に指摘があるように、『平家物語』の六道物語は『宝物集』の影響を受けているといえよう。

『宝物集』（七巻本）巻第五「不邪淫戒」には、延慶本の畜生道を連想させる記事が見られる。長文だが、延慶本と関係ある部分を引用する。

『平家物語』の建礼門院造形

京極の御息所と申すのは、延喜の女御のまいり給ふ夜、寛平法皇の、出たちみんとておはしましてみたまひけるに、心につき給ひければ、「老法師に給りぬ」とて、をしとり給ふ人の御事也（略）天竺の后ひそかに臣下にあひて、公にきかれ奉りて恒河川にして水をあみて身をきよめて懺悔する事なり。鳩那羅太子の眼をくじるといふは、阿育王の后、継子の俱那羅太子をおもひかけ給ふを、太子かたく辞し申給ふによりて、ふたつの眼をくじり給ふ事也。夏太后は嫪毐を愛し、則天皇后は長文成にあひ、（略）則天皇后と申すは、高宗の后なり。長文成とうふ色好みに値ひて、遊仙窟といふ文を得給ふ事なり。（略）高野の天皇は弓削の道鏡におもひつきて、十善の位をさえにゆづらんとして、和氣の清丸を勅使として、宇佐宮へまでまいらせ、（略）又五條の后は、太政大臣冬嗣御息女にて、仁明天皇の女御也。業平中將にあひたまひて、やさしき事ども侍りけり。さりとてあひ給へる御としかは、后四十二にておはしけるに、中將は二十五ぞ申したる。月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして。（『宝物集』）

延慶本の挙げてある殆どの人物が、ここには挙げられている。ただし、『宝物集』は、女の淫欲が仏の教えを妨げること強調しており、これに対して、延慶本は、男に浮名を立てられてしまう女の身の憂さを語り、女性を受身の立場に置いている。つまり延慶本は、建礼門院に近親相姦の噂のあったことは語っているものの、それはあくまでも女の身の憂さと「人の口のさがな」さによるものとしているのである。こうした延慶本の姿勢は、建礼

門院の不浄のことを積極的に示している源平盛衰記とも一線を画している。

さて、ここで注目したいのは、延慶本の作者が『宝物集』の「不邪淫戒」に見えない、染殿の後の話を取り入れていることである。

周知のように、染殿の后とは文徳天皇后藤原明子であり、物怪調伏のため呼んだ金剛山聖人との不幸な出会いは『今昔物語集』、『古事談』等によって知られている。本文の引用は省略するが、『今昔物語集』巻第二十の「染殿后、為天宮被燒乱語第七」によれば、金剛山の聖人が染殿后についた物の怪のための加持祈禱の折、色欲の心を起こして餓死し、天狗に転生して彼女を迷わせ、思いを遂げたところがある。人目もはばからず見苦しい行為に及ぶ彼女の姿は生々しく書かれている。延慶本の畜生道に染殿の名が取り上げられているのも別に問題にはならない。

ところが、このような染殿の後の話が、延慶本の御産の記事にも取り入れられているのである。本文を引用する。

今度の御産にさまざまの事共有ける中に、目出たかりける事は、
 太上天皇の御加持、有がたかりける御事也。昔し染殿の后と申
 しは、清和の国母にて、一天をなびかし給へりし程に。紺青鬼
 と云御物のけに被取籠て、世中の人にもさがなくいわれさせ給
 事侍けり。智証大師の御時にておわしましければ、様々の加持
 せられけれども、不叶してやみ給にけるに、今の法皇の御験物
 に御物の気の機嫌事、返々目出くぞ覚へし。

(第二本 「中宮御産有事付諸僧加持祈禱」)

先述したとおり、建礼門院の出産の時、後白河院が加持祈禱を行

なったことは疑いがない。『平家物語』の御産の場面で後白河院が登場するのは、そうした事実を反映したものであった。

問題は、この後白河院の加持祈禱に関して、染殿の話が持ち出されていることだ。後白河院の加持祈禱は事実であるし、その事実を伝えることには、法皇の加持祈禱の効験を称える意味あいもあつただろう。だが、ここに染殿の後の話を持ち出すのは、いかにも唐突な感じを抱かざるを得ない。なにしろ染殿の後の逸話は、いま言うように、金剛山聖人(紺青鬼)に犯され、穢された事例なのだ。皇子を出産した国母への加持祈禱を語るときふさわしい逸話だったとは考えにくい。

にもかかわらず、あえて染殿の後の逸話を位置させた編者の意図は、いったい何だったのだろうか。

これはあるいは、加持祈禱の験者に犯された染殿の話を提示することによって、験者を務めた舅の後白河院と建礼門院とが関係あることを、延慶本の作者が暗示しようとしているのではないであろうか。

前後したが、最後に女院の六道語りの導入部である③の記事について考えてみる。後白河院を前にした建礼門院は、自分が「万機の政を心のままに行」つたこと、平家一門の榮華のことを天上の楽しみに比して語っている。

この「万機の政」云々の記述は他の諸本には見えない延慶本独自のものである。もちろん、源平盛衰記、覚一本にも「一天四海を掌のなかに握り」、「一天四海掌のままなり」と、似たような表現がみえるが、延慶本の場合、「建礼門院之事」の章段が設けられ、それ

が安徳天皇の即位によるものと再三にわたって語られている。

①女院御年十五にて内へ参給しかば、やがて女院の宣旨被下て、十六にて后妃の位に備り、君王の傍に候はせ給て、朝には朝政を勸奉り、夜は夜を専にし給ふ。廿二にて皇子御誕生有き。皇子いつしか太子に立せ給ふ。春宮位に即給にしかば、廿五にて院号ありて、建礼門院と申き。入道の御娘の上、天下の国母にたましまししかば、世の重くし奉事斜ならず。(六本「建礼門院御出家事」)

②抑建礼門院と申は、後白河法皇の太子高倉院后、入道前大政大臣清盛の御娘、安徳天皇の御母也。十五才にして后妃の位に備り、十六才にして女御の宣旨を下し、廿二にして皇子御誕生有しかば、いつしか春宮位に立給べき天子なりしかども、位定らせ給しかば、一天四海を掌に拳り、万人卿相遍く国母と奉仰のみに非ず、九重之裏、清涼紫震之床を並べ、后妃采女にかしづかれ給き。(第六末「建礼門院之事」)

しかし、建礼門院が政治に関与したことを窺わせる記録は、今のところ見当たらない。彼女と夫の高倉天皇との関係も、『平家物語』の語るような仲睦まじいものではなかった。延慶本の「万機の政」云々もまた、作者の意図的な操作によるものであろう。

延慶本の作者は、平家一門の栄華を建礼門院と安徳天皇の存在によるものだと基本認識に立って、建礼門院を平家の政治内存在として描いているのである。げんに、安徳天皇の死についても、延慶本の建礼門院はその原因を、「何の罪に依てか、忽に百皇鎮護の御誓に漏れ給ぬるにや。是即我等が一門、只官位俸禄身に余り、国

家を煩すのみにあらず、天子を蔑如し奉り、神明仏施を滅し、悪業所感之故也」と、自分を始め平家一門の罪によるものだとしている。「平家の一門は皆建礼門院の御故に、丞相の位をけがし、国柄の政を掌どる。悪事既に超過せり。行末も今はあやぶがる。天変の現じ様恐しとぞ」(三末「大伯昂星事付楊貴妃被失事并役行者事」という延慶本独自の建礼門院非難記事は、このような基本認識の反映にほかなるまい。

以上、延慶本の建礼門院造形を見てきた。

延慶本の建礼門院造形の特徴は、後白河院と建礼門院との男女関係を暗示する独自記事に求められる。延慶本の編者は建礼門院を平家の女性として位置付けたうえ、彼女に後白河院との艶聞、宗盛との近親相姦のうわさ、政治関与の罪を背負わせた。そのため、六道語りは建礼門院本人の生々しい体験として構成されており、「其中にも道心さめがたく侍けるは、国母の衰たるにまされるは候はざりけるや」と自ら語っているように、彼女の惨めな運命こそ平家一門の救済の道だとの立場が、そこには認められる。

四 まとめ

『平家物語』の建礼門院には、安徳天皇をはじめ平家一門の救済という重要な役割が与えられている。そのため、建礼門院関連記事についての先行研究は、女院往生物語(灌頂巻)の構造・役割を問う論が多く、建礼門院の人物造形はほとんど注目されなかった。

しかし、女院往生物語の大半を占めている六道語りは建礼門院本

『平家物語』の建礼門院造形

人の人生の回顧であり、当然、そこには物語作者の造形した建礼門院像が反映されているはずだ。つまり、『平家物語』の諸本の女院往生物語の構造は、その物語を担っている建礼門院の人物造形と深く関わっている。

諸本の建礼門院造形は、たとえば、後白河院との艶聞を重視する延慶本、建礼門院に対する非難の記事をまったく排除し、妙音菩薩として造形している長門本、建礼門院を近親相姦の罪を犯して不浄な女として理解し、安徳天皇の出生への疑念を暗示している源平盛衰記、女院の姿を「盛者必衰」「諸行無常」の原則によつて完璧に裁断している覚一本というように、それぞれの構想や性格によつて異なる展開を見せている。

古態本の延慶本の場合、建礼門院は平家の権力を支えた人物、舅と艶聞のあった不貞の女性として造形されており、往生物語の建礼門院と後白河院の対面の場面には、二人の関係を暗示する独自記事が取り入れられている。

二で述べたように、建礼門院と後白河院の関係が種々取り沙汰されたのは事実だが、しかし、それは二人の男女関係の成立を裏付けるものではなかった。まして、限られた範囲にしか知られていなかったとおもわれる噂を、延慶本の作者が知っていたかどうかも確かではない。

事実はどうであれ、延慶本の建礼門院関連記事は、他の諸本と異なつて舅の後白河院との艶聞を積極的に暗示している。これは延慶本の建礼門院造形の、おおきな特徴である。

建礼門院の不貞を語る作者のねらいは、染殿の逸話から窺えるよ

うに、その原因者である後白河院の造形にあつたといえよう。延慶本には建礼門院の不貞（宗盛とのうわさをふくめて）についての非難の言葉がまったく見られず、作者の建礼門院非難は、もっぱら彼女の政治関与に向けられている。延慶本の六道語りが、不貞のことを欠く長門本や覚一本、あるいは邪淫を強調し、非難の姿勢を示す源平盛衰記などと異なる独自の姿勢を示しているのも、このような意図によるものだろう。

注1 延慶本の女院出家説話の唱道性に注目し、平氏一族の滅罪、鎮魂の祈願の具体化を指摘した小林美和（『平家物語建礼門院説話―延慶本の出家説話を中心に』、『平家物語研究』二十四号、一九八〇）、長門本の強い救済の姿勢を指摘した山田弘子（『長門本平家物語の建礼門院―妙音菩薩をめぐる物語の論理を求めて』、『山口国文学』一九八七・三）、四部合戦の本の六道が『宝物集』を貫く仏教教理を踏まえて構成され『灌頂巻』にふさわしい内容をもつと指摘した渥美かおる（『四部合戦本平家物語灌頂巻六道の原拠考―宝物集との関係を中心に』、『愛知県立大学論集』二〇号、一九六九・十二）、覚一本が他の諸本と異なり女院の得道に発展の相をもたらしていること捉えた水原一（『建礼門院と尼寺』、『平家物語の形成』、加藤中道館、一九七二）などの論がある。

注2 「後白河法皇の源―建礼門院物語をめぐる―」『日本文学四十七号 一九九八・五』

注3 「建礼門院をめぐる噂と物語」『国文学解釈と教材の研究』四

十三卷五号 一九九八・四

注4 『源頼朝』 岩波新書 一九五八

注5 「建礼門院をめぐる噂と物語」前掲

注6 ①『山槐記』 治承二年（一一七八）十月七日条 「法皇密有御幸、令奉護身給、後聞、有御布施」

②同十月十一日条 「法皇密々御幸令奉護身給、令轉讀化城喻品之間也、日没之間一部畢、」

③同十月二十七日条 「法皇又密々々有御幸、自西北面方入御、八葉御車、被懸下簾、一昨夜御幸鳥羽、聞食此気色、今朝還御、令誦法華經、内大臣被奉造立等身六観音像、」

④同十月二十八日条 「自院有御佛供養、昨夜所被造始等身不動大威徳也」

注7 たとえば、高倉院の死から間もない養和元年三月二十七日の

『玉葉』の記事には「法皇、今度除目、不可被口入之由風聞、而親信給受領」とあり、除目に後白河院の意思が作用しただろう事が窺える。

注8 『吉記』 治承五年四月九日条 「九日甲寅 天晴（略）今日中宮可有院號之由被仰下、而院可有御幸云々、依御物籠無其儀、依此事、昨日俄延引之由被仰下了、」

注9 『玉葉』 治承五年四月九日条 「十日乙卯、陰晴不定、傳聞、昨夜院號延引、是法皇依御物籠、今熊野、不可有御幸、仍所延引云々、愚案、御幸何故哉、未得其儀、」

注10 ①小林美和 「平家物語建礼門院説話―延慶本の出家説話を中心に」前掲

『平家物語』の建礼門院造形

※本文の引用は次のテキストによる。

②牧野和夫「延慶本平家物語の一考察―「風論」をめぐるて―」 軍記と語り物 第十六号 一九八〇・六

③今井正之助「平家物語灌頂巻試論―本巻との関わりをめぐって―」 日本文学 一九八三・一

注11 小学館古典文学全集『平家物語』下の頭注による。

『平家物語』 吉澤義則校註應永書寫延慶本 『平家物語』 誠社

『宝物集』 新日本古典文学大系 岩波書店 一九九三

『玉葉』 黒川真道・山田安榮校訂『玉葉』 藝林舎 一九七五

『明月記』 今川文雄訳『訓読明月記』 河出書房新社 一九七九

『吉記』 増補史料大成 臨川書店 一九六五

『山槐記』 増補史料大成 臨川書店 一九六五